

源氏物語と万葉集

——誘う女・追う女——

池田 三枝子

はじめに

昨年、文芸資料研究所の横井先生から「源氏物語と万葉集」というテーマで話をして欲しいと言われまして、最初はお断りしました。なぜなら、上代文学の研究者である私には、両者にさほど共通点があるとは思えなかったからです。『万葉集』は奈良時代（七一〇～七九四）に成立した歌集で、編纂者は大伴家持という男性貴族です。一方、『源氏物語』は平安時代の寛弘五年（一〇〇八）に成立した物語文学で、作者は紫式部です。『源氏物語』と『万葉集』とは文学のジャンルも違いますし、成立した時期にもおよそ三〇〇年の開きがあります。両者の共通点といえば、どちらも日本が世界に誇る文化遺産であるということくらいではないかと思いました。

ところがあることに気づいてしまったのです。二〇〇八年は『源氏物語』成立からちょうど一〇〇〇年、所謂「源

氏物語千年紀」でした。そして来年二〇一〇年は「平城遷都千三百年紀」なのです。ですから、その間にあたる二〇〇九年こそ『源氏物語』と『万葉集』を結びつけて語ることに意味のある年ではないかと思ひ至りました。それで講演をお引き受けすることにした次第です。

本日のテーマには「誘う女・追う女」という副題を付けました。日本の古典文学では女は待つ存在として観念されています。しかし時に「誘う女」「追う女」が描かれることがあります。このことの意味を、『源氏物語』を出発点として、『万葉集』の時代に遡り、文学史的に考察してみたいと思います。

一 老女の誘い —— 源典侍と石川女郎 ——

I 『源氏物語』紅葉賀 —— 源典侍 ——

上の御梳櫛にさぶらひけるを、はてにければ、上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、装束ありさまいとはなやかに好ましげに見ゆるを、さも古りがたうもと心づきなく見たまふものから、いかが思ふらんとさすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならず糸がきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、わが持たまへるにさしかへて見たまへば、赤き紙の映るばかり色深きに、木高き森のかたを塗りかへしたり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず「森の下草老いぬれば」と書きすさびたるを、言しもあれうたての心ば

へや、と笑まれながら、源氏「森こそ夏の、と見ゆる」とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけん
と苦しきを、女はさと思ひたらず。

典侍 君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも

と言ふさま、こよなく色めきたり。

源氏 「笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ

わづらはしさに」とて立ちたまふをひかへて、典侍「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる身の恥
になむ」とて、泣くさまいといみじ。源氏「いま聞こえむ。思ひながらぞや」とて、ひき放ちて出でたまふを、
せめておよびて「橋柱」と恨みかくるを、上は御桂はてて、御障子よりのぞかせたまひけり。

『源氏物語』紅葉賀に登場する源典侍は、五十七、八歳になっているのに非常に若作りをして光源氏に言い寄って
来る女性です。現在と違って当時の五十七、八歳といえは大変な年寄りで、老女と言って良いでしょう。

この文章の前半部分には源典侍の若作りの見苦しさが描写されています。例えば「目皮らいたく黒み落ち入りて」
と書かれています。これは「その臉はすっかり黒ずんで落ちくぼみ」という意味です。衣装がどんなに美しくて
も、扇で顔を隠しても、目元までは隠せません。女性の老いが目元から来るという感覚は、女性の方ならお分かりい
ただけるでしょう。

この若作りの典侍は派手な扇を持っています。「赤き紙の映るばかり色深きに、木高き森のかたを塗りかへしたり」
とありますが、「赤い紙の、顔に照り映えるくらいの色濃いところへ、木高い森の絵を、金泥で塗りつぶして描い
てある」ということです。赤と金の非常に派手な扇です。そこに鬱蒼とした森の絵が描かれており、「森の下草

老いぬれば」としたためられています。これは「森の下草も若々しいうちは馬も食べに來たり、人も飼い葉にするために刈りに來ますが、老いた草には馬も人も見向きもしません」という意味で、源典侍の老いの嘆きを表現したものです。

しかしこの文言は単なる老いの嘆きではないようです。というのも光源氏がこれを見て「ちよつと嫌だな」と感じているからです。それが「言しもあれうたての心ばへや」という部分です。一般的な老いの嘆きの裏に、俗に言う「男日照り」とでも申しましようか、男性が誰も振り向いてくれなくなったという意味があることを感じて、光源氏は「うたての心ばへ」と考えているのです。

ところが源典侍はそんなことは意にも介さず、光源氏に向けて「君し來ば」という和歌を詠みかけます。この和歌は、扇の絵に即して自分を森の下葉に譬え、「もう盛りを過ぎた下葉ですけれども、あなたがいらつしやるならご馳走いたしましょう」という意味のものです。「私を食べて下さい」と光源氏を誘っているわけですね。老女から誘われた光源氏はうろたえて当然断りますが、典侍は「立ちたまふをひかへて」とあるように、立ち去ろうとする光源氏を引き留めるのです。更に光源氏が典侍を振り払って出て行こうとすると、典侍は懸命に追いつがる（「せめておよびて」）のです。

以上の源典侍の行動は次のようにまとめられましょう。

〔源典侍の行動〕

「君し來ば」……誘い歌をうたいかける

「立ちたまふをひかへて」……立ち去ろうとする源氏を引き留める

「ひき放ちて出でたまふを、せめておよびて」……振り払う源氏に追いつがる

つまり源典侍とは、非常に美しく若い男性を「誘い」、逃げられると「追う」老女なのです。

Ⅱ 『万葉集』 卷二相聞部 —— 石川女郎 ——

石川女郎、大伴宿禰田主に贈る歌一首 即ち佐保大納言大伴卿の第二子にあたり、母を巨勢朝臣といふ

みやびをと 我は聞けるを やど貸さず 我を帰せり おそのみやびを

(卷二・一二二八)

大伴田主、字を仲郎といふ。容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし。時に、石川女郎といふひとあり。自り双栖の感をなし、恒に独守の難きことを悲しぶ。意に書を寄せむと欲へど、良信に逢はず。ここに方便を作して、賤しき嫗に似す。おのれ搦子を提げて、寝側に至る。哽音躋足し、戸を叩きて諮ひて曰く、「東隣の貧女、火を取らむとして来る」といふ。ここに仲郎、暗き裏に冒隠の形を知らず、慮の外に拘接の計に堪へず。思ひのまにまに火を取り、跡に就きて帰り去らしむ。明けて後に、女郎、既に自媒の愧づべきことを恥ぢ、復心契の果らざることを恨む。因りて、この歌を作りて謔戯を贈る。

大伴宿禰田主の報へ贈る歌一首

みやびをに 我はありけり やど貸さず 帰しし我そ みやびをにはある

(卷二・一二二七)

男性を誘う老女という話のパターンは『万葉集』にも見られます。卷二相聞部所載の石川女郎と大伴田主のやりと

りがそれです。

大伴田主は「容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし」ということです。眉目秀麗・品格高雅で光源氏のような男性です。石川女郎はその大伴田主といい仲になりたかったので、手紙を出そうにも間を取り持つ仲人がいませんでした。そこで一計を案じて「賤しき姫」に成りすました上で、「私はあなたの東隣に住む老婆です。火種がなくなつてしまったのでどうか貸してください」と言つて訪ねて行きます。ところが真夜中で暗かったこともあり、大伴田主はその老女が実は若い女性（石川女郎）であることに気づかず、火種を貸してやつただけで帰してしまいました。

石川女郎は、相手の家に押しかけていくというかなり強引な方法で田主を誘おうとしたのですが、失敗してしまいます。それが恥ずかしいので「みやびをと我は聞けるをやど貸さず我を帰せりおそのみやびを」（巻二・一二六）という歌を詠んで田主に贈りました。「おそ」というのは「のろま」とか「間抜け」という意味ですが、相手を「おそのみやびを」とののしるこの歌は、「泊めもしないで私を帰したあなたなんか風流みやびじゃないわ」という揶揄となっています。これを聞いた大伴田主は、「みやびをに我はありけりやど貸さず帰しし我そみやびをにはある」（巻二・一二七）と歌い、「あなたを泊めないで帰した私こそ風流みやびなのです」という自己主張をしています。

後世の歌物語にも通じるような面白い話なのですが、ここで注意していただきたいのは、前述の『源氏物語』との共通点です。源典侍が老女であつたように、石川女郎は老女に身をやつして田主のところに出向き、共寝しようとしています。『万葉集』に書かれているので「そうか」と聞き流してしまいがちですが、現代の私たちが普通に考えれば、なぜ男性を誘うのにわざわざみすばらしい老女の恰好をして行かなければならないのか不思議です。私なら一張羅を着て行くでしょう。

このことは、当時の社会には現代とは異なる論理があったということを示しています。女が男を「誘う」という行動が、そもそも普通の女には成し得ないものであったことを意味します。だからこそ石川女郎は老女に扮しているのです。

なぜ普通の女は男を誘ってはいけなかったのでしょうか。それは、当時の人々にとって、普通の女性とは「待つ」ものであったからです。「普通の女は待つもので、自ら誘うものではない」という観念があったからこそ、「誘う女」は普通ではないとされたのです。その理由について次に考えていきたいと思います。

二「待つ女」の規範性 —— 磐姫と石之日売 ——

I 『万葉集』の磐姫

〔歌群A〕（巻二巻頭歌群）

磐姫皇后、天皇を思ひて作らす歌四首

①君が行き、日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ

（巻二・八五）

右の一首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載せたり。

②かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 岩根しまきて 死なましものを

（巻二・八六）

③ありつつも 君をば待たむ うちなびく 我が黒髪に 霜の置くまでに

（巻二・八七）

④秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方に 我が恋止まむ

（巻二・八八）

右に挙げた〔歌群A〕は『万葉集』巻二の巻頭歌群で、その作者とされている磐姫は第十六代天皇である仁徳天皇の皇后です。磐姫は五世紀の大豪族葛城氏出身の女性で、万葉歌人のうち最古の人物でもあります。その磐姫が仁徳天皇を思つて作つたとされるのが右の四首です。その中で注目していただきたいのは、①から③への磐姫の心情の変化です。

〔磐姫の心情〕

①「迎へか行かむ待ちにか待たむ」……迎へに行くか待ち続けるか逡巡している

←

③「ありつつも君をば待たむ」……黒髪に霜が置く（白髪になる）まで待つ決心をする

『万葉集』全二十巻で巻頭歌は特に重視されており、巻頭には記念碑的な作品を置くのが通例です。このことから、この歌群は「天皇の妻としてあるべき姿」を示す作品であると理解されています。天皇の妻となるべき女性性は「待つ女」でなければなりません。迎へに行こうか待ち続けようかと逡巡した末に待ち続ける決心をした磐姫皇后の心情を詠むこの歌群には、『万葉集』の時代における「待つ女」の規範性が如実にあらわれています。「待つ女」こそ理想の女性像だったのです。

しかもこの歌群は、磐姫の実作を掲載したというような単純なものではありません。磐姫の生きた五世紀には「五・七・五・七・七」の短歌形式はまだ成立していません。誰かがわざわざ短歌形式の作品群を仕立て、それを磐姫が詠んだ歌として巻二の巻頭に配列したのです。そのあたりの作爲を窺わせるのが〔歌群B〕〔歌群C〕です。

〔歌群B〕〔歌群A—③の異伝〕

或本の歌に曰く

⑤居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 我が黒髪に 霜は降るとも

（巻二・八九）

右の一首、古歌集の中に出でたり。

〔歌群C〕〔歌群A—①の異伝〕

古事記に曰く、軽太子、軽太郎女に奸けぬ。故にその太子を伊予の湯に流す。この時に、衣通王、恋慕に堪へずして、追ひ往く時に、歌ひて曰く

⑥君が行き 日長くなりぬ やまたづの 迎へを行かむ 待つには待たじ

（巻二・九〇）

これらは〔歌群A〕に続いて配列されている作品です。題詞にあるように⑤は現在では散逸してしまった「或本」に載る歌で、⑥は『古事記』に掲載されている歌です。⑥の題詞に記されている軽太子は第十九代允恭天皇の皇太子で、軽太郎女はその同母妹です。当時、異母兄妹の間の通婚は認められていましたが、同母兄妹の間では認められていませんでした。しかし、軽太子は軽太郎女があまりに美しかったので、我慢できずに関係を持ってしまったのです。そのため伊予の湯（現在の道後温泉）に流されてしまいます。衣通王とは軽太郎女のことです。美しさが衣を通して輝くほどだったことからこの別名があります。彼女が、流されていく軽太子を恋い慕って追いかけて歌ったのが⑥の歌です。

この〔歌群B〕〔歌群C〕と〔歌群A〕とを比較すると、①と⑥、③と⑤はよく似ており、①は⑥を、③は⑤を元に改作したものと考えられています。

〔①は⑥の改作〕

⑥ 「迎へを行かむ待つには待たじ」……「追う女」の歌

←

① 「迎へか行かむ待ちにか待たむ」……迎えに行くか待ち続けるか逡巡している

〔③は⑤の改作〕

⑤ 「居明かして君をば待たむゝ我が黒髪に霜は降るとも」……一晩中待つことを詠む歌

←

③ 「ありつつも君をば待たむゝ我が黒髪に霜の置くまでに」……年を取っても待ち続けることを詠む歌

⑥の「迎へを行かむ待つには待たじ」が①では「迎へか行かむ待ちにか待たむ」となっています。「とても待つてはいられませんので迎えに行きます」という部分が「迎えに行くか待つべきか逡巡しています」と変えられています。助詞や助動詞等を微妙に入れ替えることにより「追う女」が「迷う女」に変わっているのです。

また、⑤「居明かして」が③では「ありつつも」に、⑤「霜は降るとも」が③「霜の置くまでに」と変えられています。「居明かす」とは「眠らずに待つ」という意味で、髪に霜が降りる程寒くても一晩中待つという決意が歌われています。それが③では、霜は白髪 of 譬喩表現となり、同じ「待つ女」であっても、一晩だけでなく一生かけて待ち続けるという決意の歌に変わっているのです。それ以外の②④も含めて〔歌群A〕の四首は磐姫の実作ではなく、既存の作を利用して「待つ女」の歌に仕立てられたものなのです。

『古事記』『日本書紀』ではイハノヒメ（『古事記』の表記は「石之日売」、『日本書紀』の表記は「磐之媛」）は嫉妬深い女性として描かれています。決して「待つ女」ではありません。例えば『古事記』には次のように表現されています。

其の太后石之日売命は、嫉妬すること甚多し。故、天皇の使へる妾は、宮の中を臨むこと得ず。言立つれば、足もあがかに嫉妬しき。
（『古事記』仁徳天皇条）

ここで言う「足もあがかに嫉妬しき」の「あがか」とは、バタバタと地団駄を踏むように「悔しい」と足を踏みならすということです。これではどう見ても素敵な女性とは言えません。当時の人々にとっても同様でしょう。さらに皇后の嫉妬を恐れて、他の妃たちが天皇に近づけないというのは、現実問題として困ったことです。

そんな嫉妬深いイハノヒメが『万葉集』で「待つ女」に変化したのには、ある事情がありました。第四十五代天皇である聖武天皇の皇后となった光明子の存在です。光明子の立后のためには、磐姫が嫉妬深い女性であつては都合が悪かったのです。

Ⅱ 光明子の立后

光明子は藤原（中臣）鎌足を祖父とし、藤原不比等を父としています。聖武天皇は東大寺を建立した奈良時代の天皇ですが、この時代、皇族出身の女性が皇后となるのが通例であり、臣下である藤原氏出身の女性が皇后となるのは極めて異例のことでした。平安時代になると藤原氏の女性の立后は当たりまえのことになりますが、奈良時代の藤原氏は、権力を手中にしているとは言え、まだ新興勢力に過ぎなかったのです。

天武天皇 40

草壁皇子 高市皇子

文武天皇 42 長屋王

聖武天皇 45

藤原鎌足

不比等

45
聖武天皇

光子

武智麻呂

房前

宇合

麻呂

前述のように磐姫は葛城氏の出身です。藤原氏は他氏出身の女性の立后の先例として、磐姫の存在をアピールしようとした。その際、磐姫が『古事記』『日本書紀』に記されるような「嫉妬深い女」では悪い印象を与えかねません。藤原氏には何としても磐姫を理想的女性像に改変する必要がありました。その理想的な女性像というのが「待つ女」です。こうして『万葉集』の磐姫は「待つ女」として造形され、人々に強い印象を与えるべく、その「作歌」が卷二巻頭を飾ることとなったのです。

それでも宮中には藤原氏出身の光明子立后に対する反対論が根強く残っていたと考えられます。そこ

当時の権力者に選ばれた理想的女性像である「待つ女」とは、それほど規範性が強いものだったのです。

Ⅲ 規範性の淵源 —— 神の訪れを待つ巫女 ——

では、なぜ「待つ女」が理想とされ、規範となったのでしょうか。

そこには日本人の神観念、宗教観念が大きく関係しています。古代の日本人は、神とは村落共同体にずっと居続けるものではなく、一年のうちの一定の時期（稲作とつながりの深い収穫感謝の時期など）に周期的に訪れて、共同体に祝福を与える存在だと考えていました。人々はその神に新しく収穫した米を捧げて感謝しました。そして、神は共同体に祝福を与えた後、何処へともなく去って行くのです。周期的に訪れては去っていく来訪神（客人神^{まれびと}）です。

来訪神はお客様ですから接待しなければなりません。接待し、ご機嫌をとって、来年の豊作を祈願するのです。豊作か不作かというのは、古代の人々にとっては死活問題です。不作は村落共同体の人々の死に直結します。豊作祈願はまさに命をかけた祈りでした。来訪神にはできるだけの奉仕をして、喜んでいただいて、来年が豊作となるようにしなければならぬのです。

その奉仕の役目を主として担うのが「巫女」でした。村落共同体の巫女は神が来る前から精進潔斎をして、物忌みの生活を送ります。男性と接触することも穢れに触れることもなく、神に着せかける神衣を織りながら（機織りをしながら）神の訪れを待ちます。そのためこの巫女を「機織つ女^{たばため}」と呼びます。「機織つ女」は、神が訪れると「神の嫁」という資格で神を接待します。夜も共にして「結婚」という形を取るのです。即ち、来訪神は「妻訪ひ」をしていることになり、「機織つ女」は神の訪れを待つ「待つ女」ということになります。この神と巫女との関係が、人間

周期的に訪れて、共同体に祝福を与える神Ⅱ来訪神（客人神）
まれびと

奉仕（祭祀）

神衣を織りながら、神の訪れを待つ巫女Ⅱ「神の嫁」
（機織つ女）
たなはた

の男女関係の規範となりました。

男女が結婚すると子供ができます。古代の人々にとってそれは大変神秘的なことでした。ゆえにその神秘的な出来事は神に淵源を持つと考え、結婚や婚姻に際しては神と同じように行動しなければと考えたのです。こうして男は「妻訪ひ」し、女はそれを「待つ」というのが、

結婚や恋愛において最も望ましい形となって行きました。

ところで、「機織つ女」という言葉を聞いて、七夕の伝説を思い起こされた方も多いのではないのでしょうか。七夕の行事は、現在でも、幼稚園・小学校の催し物や地方の有名な祭りとして日本中で広く行われています。元々七夕は中国の伝説なのですが、それが日本に渡来して広く受け入れられたのは、牽牛との年に一度の逢瀬を待ち続けて機織りをするという織女の姿が、来訪神を待つ巫女（機織つ女）の姿と重なったからだとされています。七夕は本来「しちせき」ですが、これが「たなはた」と読まれるようになったのはそのためです。こうした現象からも、日本人の心に「待つ女」が理想として深く根づいていることが窺えます。

三 「誘う女」「追う女」の異常性 — 記紀神話から万葉歌へ —

「待つ女」の規範性が強いということは、その反対に「誘う女」「追う女」は異常であり、その結婚や恋愛は異常で

あるということになります。その異常性は記紀の神話・伝承に顕著に見ることができます。幾つか例を挙げてみましょう。

I 異類婚 —— 肥長比売 ——

爾くして、其の御子、一宿、肥長比売に婚ひき。故、窃かに其の美人を伺へば、蛇なり。即ち、見畏みて遁逃げき。爾くして、其の肥長比売、患へて、海原を光して船より追ひ来つ。故、益す見畏みて、山のたわより、御船を引き越して、逃げ上り行きき。

〔古事記〕垂仁天皇条

異類婚とは人間ならざるものとの婚姻です。ここに登場する「御子」とは、第十一代天皇である垂仁天皇の皇子本牟智和気です。この皇子が共寝をした肥長比売という女性の正体は蛇でした。肥長比売は、恐れて逃げ出した皇子を、海原を照らして船で追いかけて行きます。「追う女」は異常なものであるという観念がここから読み取れます。

II 謀反 —— 女鳥王 ——

亦、天皇、其の弟速総別王を以て媒と為て、庶妹女鳥王を乞ひき。爾くして、女鳥王、速総別王に語りて曰はく、「太后の強きに因りて、八田若郎女を治め賜はず、故、仕へ奉らじと思ふ。吾は、汝命の妻と為らむ」といひて、即ち相婚ひき。是を以て、速総別王、復奏さず。

〔古事記〕仁徳天皇条

また、仁徳天皇の異母妹・女鳥王は別の意味での異常性を示しています。女鳥王は仁徳天皇の求婚を退け、別の異母兄・速総別王に自ら求婚します。その後、速総別王をそのかして謀反を図るも發覺し、逃避行の末、二人とも殺されることとなります。積極的に自ら求愛するような女は異常であり、不幸な結末しかもたらさないのです。

Ⅲ 同母兄妹婚 —— 輕大郎女 ——

……故、後に亦、恋い慕ふに堪へずして、追ひ往きし時に、歌ひて曰はく、

君が往き 日長くなりぬ 造木の 迎へを行かむ 待つには待たじ（此の、山たづと云ふは、是今の造木ぞ）

……如此歌ひて、即ち共に自ら死にき。

（『古事記』 允恭天皇条）

禁忌であった同母兄妹婚も「追う女」の異常性をもって語られています。先程触れたカルノオホイラツメ（『万葉集』の表記は「輕太郎女」、『古事記』の表記は「輕大郎女」）の例がそうです。同母兄妹婚の禁忌を侵犯した輕大郎女は、追放された兄を追って共に死ぬという不幸な結末を迎えます。

これらの例から言えることは、規範性の対極にある異常性は現実世界を超越し、虚構の文芸的世界を描き出す、ということ。本牟智和氣が肥長比売（正体は蛇）と結婚するというのも非現実的な話ですし、謀反や同母兄妹婚はあり得ないことではないといえ、王権に対する最大の罪であったり非常に厳しい禁忌の侵犯であったりして、そう起こる事件ではありません。ところが、「誘う女」「追う女」が登場することで、話が現実世界を超越して、虚構

の文芸的世界の展開を可能にします。要するに大変に面白いストーリーになるのです。

IV 不倫 —— 但馬皇女 ——

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穗積皇子を思ひて作らす歌一首

秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに 君に寄りな言痛くありとも

(巻二・一一四)

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、但馬皇女の作らす歌一首

後れ居て 恋ひつつあらずは 追ひ及かむ 道の隈廻に 標結へ我が背

(巻二・一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らす歌一首

人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川渡る

(巻二・一一六)

『万葉集』にはさすがにそれほど非現実的な話はありませんが、異常な恋愛の例はあります。その一例が不倫です。

但馬皇女は天武天皇の娘で、異母兄で左大臣の要職に在った高市皇子の妻となっていたと考えられている女性です。ところが、高市皇子とは年齢がかなり離れていたせいか、但馬皇女は別の異母兄でありまだ若い穂積皇子を好きになってしまったのです。右の三首はそうした恋を詠む歌です。

但馬皇女は人が噂しても、それに関係なく穂積皇子を好きになり、離ればなれになれば、追いかけてようとし、その

関係が世間にばれても、止めるどころか、自分から積極的に押しかけようという「追う女」であり続けます。その恋の結果がどうなったか明確ではありませんが、次の歌から不幸な結末になったことが推測できます。穂積皇子は亡き皇女の墓に行くことができず、遠くから望むだけだったのですから、幸せな恋だったとは思えません。

但馬皇女の薨ぜし後に、穂積皇子、冬の日雪の降るに、御墓を遙かに望み、悲傷流涕して作らす歌一首

降る雪は、あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに

(巻二・二〇三)

これまで見てきたように、「誘う女」「追う女」の結婚や恋愛は異常です。その異常には、異類婚のような女自身の異常と、同母兄妹婚や不倫のような関係の異常と二つのタイプがありますが、いずれにせよ、「誘う女」「追う女」の恋は不幸な結末を迎えます。男からすればまっとうな恋の相手ではないということです。

『源氏物語』では、止せばいいのに光源氏は源典侍と戯れに関係を結んでしまいます。結局それがばれて、親友である頭中将から散々からかわれることになります。ささやかながら不幸な結末です。光源氏は「誘う女」「追う女」を相手にしてはいけなかったのです。

おわりに — 文学史の展望 —

「誘う女」「追う女」は、源典侍や石川女郎のように老女として描かれたり、肥長比売のように動物であったりします。普通の人間ではないという意味での異人性を持っています。今日取り上げた例ばかりでなく、日本の文学では

「誘う女」「追う女」を妖怪・化け物・幽霊などに擬する例が数多く見られます。

例えば「牡丹灯籠」のお露さんは幽霊となって毎夜下駄の音を鳴らしながら恋しい男の所へ通います。また『平家物語』には一条戻り橋で渡辺綱が美しい女に「家まで送って」と誘われる場面があります。綱が「おかしい」と思いながらも送って行くとこれが実は鬼だったという話です。古典文学ばかりではありません。今から三十数年前でしたでしょうか、流行した都市伝説「口裂け女」というのも、マスクをかけて自分から寄って行って「私きれい？」と聞き、これに不用意に答えるとマスクを取って追いかけて来る女です。このように日本の文学史、更には文化史全体を概観すると、「誘う女」「追う女」は異常な存在であることが分かります。

これはきちんと調べたわけではないのですが、「誘う女」「追う女」が異常であるという考え方を打ち破るには、外国から新たな概念を持ち込むしかなかったと思われる例があります。それはバレンタインデーです。外国の習慣の名を借りないと「女性から誘ってもいい日」を作れなかったほど、日本人の心性には「誘う女」「追う女」の異人性が染みついているようです。

現在の若い男女の間でも、男性が見知らぬ女性に声をかけて誘うことを「ナンパ」と言いますが、その反対に女性が男性を誘うことを「逆ナンパ」と言います。敢えて「逆」と言わなければならないのは、「誘うのは男性から」という考え方がそれだけ日本人の心に深く根づいている証拠と言えましょう。

それでは私の話はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

〔注記〕『源氏物語』『万葉集』『古事記』の引用は新編日本古典文学全集に拠る。